
MHP3 命を断ち繋ぐ者

餓狼の長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MHP3 命を断ち繋ぐ者

【Nコード】

N7536Q

【作者名】

餓狼の長

【あらすじ】

東洋の海で事故にあった羽氷 雪は、ある小さな村へと流される。そこで、ある事からハンターになる。ハンターになって、モンスターを狩ったり、人助けをしたり。色々な困難に立ち向かいながら、学ぶものとは…。

プロローグ

プロローグ

ここは東洋の国の海。そこに一隻の船があつた。

「ねえ父さん！あとどれくらいで、目的地に着くの？」

「焦るな。まだ先は長いぞ！このくらいで急いでまだまだだな。」
と僕の父さんは言う。

この船に乗ってから、もう3ヶ月も経つのに。

あ、僕？僕の名前は 羽氷 雪。父さんと一緒に航海をしているんだ。

航海の目的は秘密だとさ。

僕の仕事は人を手伝う事。仕事とも言えないけれど、大切なんだって。

つてことで、今父さんから頼まれた荷物をマストの方に運んでるんだ。

あれ？あの海の中で青白く光ってるものは何だ？あれは…。

「父さん！」

僕が叫んだと同時に、船は大破した。
そして僕も暗い闇へと落ちていった。

暗転世界からぬけだすと…

「…ようぶ？」

僕は肩をとんと叩かれている。

体が凄く疲れているのに、何故起こすのだろうか。

「大丈夫?!」

!!!!!!

さっきよりもつと強い力で叩かれたのと大きな声が聞こえたため僕の意識は、戻った。

僕が目を開き見たと見たこともない風景と、1人の女の人の姿があった。

僕の頭はまだここに居る理由を理解をしていない。

まず僕は、上体を起こして、辺りを見回す。

前方に海があり、後方に森がある。もちろん、ここには見覚えはない。

次に僕をおそらく、助けてくれた人に話しかける。

「何故僕はここに居るのですか？」

彼女は、呆気にとられてしばらくした後

「君がここに倒れていたの。理由は分からない。でもとにかく助かってよかった。」

えっ?自分がここに倒れていた?

その事実を頭が理解した途端、僕の記憶がフラッシュバックした。

父さんと航海に出ていて、荷物を運んでいたら、青白く光るものが見えて、それが近づいて…。

いきなり僕は激しい吐き気に襲われた。

ただ、父さんや仲間を失い、ひとりぼっちになったというのに悲しみは込み上げなかった。

それはおそらく、自分のおかれている状況のほうが何倍も危なかったからだ。

彼女の背後に、緑色の飛竜がいて、僕と彼女を襲おうとしていた。

暗転世界からぬけだすと…（後書き）

いかがでした？

モンスターがあんまり出てません。すいません。

これからどっぷり出できますのでよろしく願います。

あとは、キャラ紹介ですがもうちょっと、キャラが小説内で固まっ
てからしようと思いますので、楽しみにしていて下さい。

これからも「命を断ち繋ぐ者」をよろしく願います。

狩人の凄さ

あの飛竜は見た事がある。話を聞いた事がある。

雌火竜 リオレイア

僕が聞いた話では普通の人間が出会ったりすれば、たちまち殺されてしまう。ときた。

一瞬のスキについて逃げ出そうと考えたが、僕にはそんな芸当ができるはずもないし、それ以前に、蛇に睨まれた蛙のように固まって動けない。

リオレイアは、雄叫びをあげた。凄まじい音が僕を襲う。僕は耳をふさいでいる間に、

僕は死んだな。と未来が見えたような気がした。

でも、僕は超能力者じゃない。そんな未来は一瞬で消えた。

目の前にいた1人の人が立ち上がり、背中にかけていた鞘から刀を取り出して、いまにも噛み付こうとしていたリオレイアの頭を斬ったからだ。

そう目の前にいた、彼女はハンターだった。

雌火竜の動きをもう知っているかのような身のこなしで、猛攻を避けていく。そしてリオレイアのいたところから血を噴出させていく。

頭や脚、翼、尻尾などを力強くそしてなめらかに斬っていく。

でも、相手は自然界の頂点に君臨する者だ。いくらか斬られていれば、相手は強い奴だと本能がそう伝える。それと同時に、本能は弱者を攻撃すると、命令を出す。

弱者〃僕だ。

リオレイアはこちらを向いて、走ってくる。当たると即死は免れない。

でも僕は動けない。そのとき

「目をつぶって！」

と声がした。言われたままに目を瞑ると軽い爆発音が聞こえた。目を開けると、リオレイアは僕やハンターさんの位置を見失っていた。

リオレイアは目がおそらく見えなくなったと思う。その隙にハンターさんは、頭を斬りつけた。

すると、頭蓋骨が折れる音がして、雌火竜は地に伏して二度と動く事はなかった。

その瞬間僕はまた気を失った。

父親との再会、あのひととの対面。

僕が目を覚ますと、広くて白1色の世界にいた。もちろん、こんな所には1度も来た事ない。

先ほどいた見たこともない風景でも現実味があつたけれど、今回は全くない。

そんな時、その白い世界の地平線から、ある男が1人歩いて来た。その男の名前は、羽氷 剛。僕の父さんで、1番尊敬できる人だ。

「父さん生きていたの?! よかつ…」

「た」を言おうとしたときに父さんは首を振った。

その瞬間、僕の父さんは死んでいると分かったが、僕の心の整理ができていたのか喉から熱いものが込み上げて、目から涙がこぼれるなんて事はしなかった。

父さんは話す。

「雪。よく聞けよ。お前は何をするにも悔いのないようにしろ。分かったか?」

「分かった。だけど、今は何をしても悔いが残りそう。どうしたらいいかな?」

「お前のできる事をしっかりやれよ。そうすれば、悔いのないことが、絶対出来る。最善は何かとか考えるなよ。考えることは時として、人を過ちの道へと導いてしまうからな。」

と、父さんが話し終わると、白い世界は消え始めた。

「おっと、時間みたいだ。頑張れよ。雪。」

父さんが、そういった瞬間、僕の周りは白い世界から、色のついた世界。もとの世界に戻った。

僕は、ベットの上に寝ていた。さっき見たものは夢だった事は分かっているけど、父さんの言葉は本当だったと思う。いや、絶対。

ところで、ここはどこなんだろう?

すると、ドアの向こうでなにやら音が聞こえる。

ガチャガチャやらスタスタやら。生活音ではあるが、やけに騒がしい。

「賑やかだな…。」

僕がボソツと独り言を言うと、さっきの生活音がピシャツと止まり、目の前にあるドアが開いた。

僕、悪い事言ったっけ？なんて考える暇はなかった。

「おはよ〜。」

さっきのハンターさんが入って来た。

「生き返ってよかった〜。もう死んだかと思ったよ。」

死んだ人間をベットに運び込むか？とも思ったけど、相手は命の恩人。失礼な事は言えない。

今になって考えると、まだ知らないことばかりだ。悪いとは分かっていたけど、質問攻めをすることにした。

「あのーここは何処でしょうか？」

「ん？ここ？ここはナミトって言う村で、ここは私の家っていうかそんなトコ。」

げっ！？自分の顔がみるみる熱くなるのが分かる。こ、ここは次の質問に移ろっ…！

「あの、ここにはどうやって僕は連れて来られたのですか？」

「ああ、私がおぶってきたよ？」

ガラガラガラガラ…

僕の頭の中で何かが壊れた。

何故僕の質問は変な方向へ飛ぶんだろう？いいや！もうベタな質問をしよう！

「すいませ〜ん。お名前は何というのでしょうか？」

「あ！ゴメン！まだ言っていなかったね。私の名前はラテ・アフィルス。さっきの見たと思うけど、この村で、ハンターやってるんだ。」

あと、無理に敬語使わなくていいよ。」

ラテさん、気さくだなあ。あ…。僕も自己紹介してなかったあ！

「僕は、ユキ ハゴオリといいます。僕が、名前言うの忘れててすいませんでしたあ！」

何緊張してんだ僕。変に叫んだし、バツカじゃないの。

「そう、ユキ君か。よろしく。」

「よ、よろしくお願いします！」

結局、ガチガチの敬語だったし。

その後、僕はまだラテさんの家にいるのに気づいて、建物を飛び出した。

少年の決意

僕はラテさんの家を飛び出した後、もう少し冷静になってみた。船が壊れて、祖国に帰れなくなったこと。そしてこの村に流れ着いたこと。

ラテさんから救ってもらったこと。それから憧れを抱いたこと。

最後に僕の父さんの言葉。

「やれることはしっかりやれよ。」

この時僕は決めた。僕はハンターになるんだと。

――――――――――

僕はラテさんの家にまた入れてもらい、話をすることにした。

「ら、ラテさん。し、質問があるんだけど…。」

大事な話をする事もありガツチガチだ。

「ん？どんなこと？」

「は、ハンターになるには、どうしたらいいんですか！」

緊張のあまり、大声を出してしまった。

「ああ、そんなコト。あそこのクエストカウンターで、受付を済ませばいいんだよ。」

なるほど。あんな所でハンター登録もやっているのか。

さあ質問というかお願いはあと一つだ。

「ら、ラテさん。もう一つあるんだけどいいかな？」

いいよとラテさんが頷く。

「僕がハンターになるってコトは、超新米な訳で、すぐやられちゃうし、基礎もボロボロ？な訳だから、

その…僕の師匠せんせいになつてくれませんか！」

「ほ？」

ラテさんは驚いた様な声をだしたが、その直後。

「^{せんせい}師匠なんていう身分じゃないよ。でもどうしてもって言うのなら、やってもいいよ。やるからにはビシビシ鍛えるからね。覚悟しといてよ。」

と笑いながら答えてくれた。僕にとって1番嬉しい返答だった。

その後、僕はクエスタカウンターに行った。

「こ、こんにちは。」

と僕が自信なさそうに挨拶をすると、奥の方で書類を忙しそうにしていた受付嬢の人がカウンターのの方にやって来た。

「こんにちは。見かけない顔ですね。」

うつ。痛いトコ突かれた。ここは正直に話そう。

「あ。僕は他の国から漂流ってというかそういうことにあっただんです……。」

「へへ。大変でしたね。」

こりや、信じてない感じ。本題にさっさと移った方が無難だな。

「あの〱ハンターの新規申請をしたいのですが。」

「あゝその件ですか。じゃあこの紙に名前等を書いて下さい。」

項目を読むと、名前とか性別とか年齢とか個人情報を書く欄がびつしりある。

個人情報を書き込んで行くと、住んでいる地域という欄にぶち当たった。

その様子を受付嬢の人に見られて、

「あの、もしかして家がわからない訳ではないですよね。」

グサツ。この人の話は、とにかく痛い。

「まあ、家が無いっていうか、帰れないっていうか、決まってないっていうか……。ハハハ。」

もう笑うしかない。

「ならナミト村って書いてればいいよ。多分ココに住むようになるだろうし。」

え？いいの？みたいな顔で、紙をじーっと見ていたら

「もう書いちゃっていいんだよ。書かないとハンターになれないか

ら。」

言われるがままにナミト村と書いて受付嬢の人に渡した。

「えーっとユキくん？ 今日これを本部に送るからハンター生活は明日から。あと私の名前はレミナ・キリト。よろしく。」

「あ、よろしくお願いします。」

これで登録は終わった。

ハンターとしての人生を踏み出した最初の一步だった。

ハンター修行始めます。 (上)

「ふわゝあ。よく寝たあ。」

僕は、目が覚めると伸びをして、ベットから出た。

その後、顔を洗い家の外に出て、大きく息を吸い込んだ。冬の冷気が体の中に入ってきて、僕の目を完全に覚ます。今日から狩人としての道を歩み出す。それだけで、気合が入った。

僕は、ラテさんの家に向かった。

ラテさんは家の外で、もう待っていた。集合時間まではまだ20分前だったが。

ラテさんは僕以上に気合が入っている。顔がキリツとして、まっすぐ前を見つめている。その目は、いかにも獲物を捕らえる狩人の目であり、自然界の上位に君臨する者たちと十分渡り合える様な感じがするものだった。

「おはようございます。お待たせしてすみません。」

「あ、いいいいいよ。こんなに早く出た私がいけないし。じゃあ早速、鍛冶屋に行くよ!」

「は、はい!」

鍛冶屋は村の奥にあつて、そこにあつた土で窯がつくられていた。

「おはよう。おじいさん。」

「おう。ラテちゃん。おっともう1人は見かけねえ顔だなあ。恋人かい?」

この人ちよつとスケベだなとか思いながらも、ちよつと見つめて見る。特徴的に、おそらく竜人族だ。おっと挨拶しなきゃ。

「おはようございます。ユキ・ハゴオリといいます。ラテさんの弟子ということで、来ました。よろしく願いします。」

「おー。もうラテちゃん弟子なんてとったのかい？早いね。で、今日は何のようだい？」

「こら、無視か。マジでスケベじゃないのか。」

「この子の防具と武器を買いに来ただけ、チェーン一式とハンターナイフある？」

「おう。でもな。この頃ハンターナイフは素材と安全性の関係上作れなくなってきたから、近年新しく出てきたユクモノ鉈でいいかい？同性能だし、強化も同じだから。」

「強化とか性能とか専門用語の様な気がしてちんぷんかんぷんだ。」

「はい。いいですよ。ユキくん。サイズ幾つ？」

「あ、ぼくは140くらいです。」

「140だな。さあ試着室に入って試着してくれよう！」

僕は試着室に入って、チェーンという防具を見た。本当に鎧の様なもので見ただけで気が引き締まる思いだった。早速、防具に着替えてみた。ゴツゴツとはしているものの、動きやすい。

まさに芸術だ。

「ピッタリかあ？」

鍛冶屋のおじいさんの声が聞こえる。

「はい！ピッタリです！」

と言って外に出た。すると、おじいさんは可動部を確認して、

「うおし！OKだ！武器は持つてくるから待つてな。」

というと、鍛冶屋の奥の方へ入っていった。

「ユキくん。今日から特訓始めるけど、大丈夫だよな？」

「もちろんOKです！」

すると、鍛冶屋のおじいさんがやってきて、

「これがユクモノ鉈だ。鉄鉱石と良質な木でできているから、20年は保証するぞあ。」

僕はそれを受け取って腰にセットした。

さあこれで準備は整った。

「今日は、ラテちゃんの初弟子だから、装備代はまけてやるよ。大切に扱ってくれよ。」

僕とラテさんは、おじいさんに手を振って別れをつげた。

その後、僕はラテさんと、クエストカウンターへ行った。

「レミナさん。工作中失礼します。クエストを受注しに来ました！」

「ラテ、やけに元気ねえ。その子のおかげかな？」

僕？僕なんにもしてないけど。

「そうかもね。それでどんなのが来ているの？」

「あー。えーと、リオレウスとかディアブロスとか……。」

「いやそんなのじゃなくて、キノコとかないの？」

「あー分かった。その子のクエストね。多分未経験だろうから、特産キノコ8個ぐらいでいい？」

「うん。大丈夫。」

クエストの受注書を受け取った僕たちは、村の出入り口にあった、竜車に乗って目的地「溪流」へと向かった。

ハンター修行始めます。 (上) (後書き)

人物紹介

ユキ・ハゴオリー（羽氷 雪） 14歳 男

本作の主人公。

父との航海中に事故にあって、ナミト村に辿りつき、後ハンターとなった少年。

もともと明るい性格で正義感が強い。

趣味は、読書らしく本が昔はたくさんあったとか。

ラテ・アフィルス 20代前半 女

ちよつと間が抜けていて、天然な所があるが、凄腕のハンター。

描写はないが、ゴールドルナ装備を愛用している。

見かけは華奢だが、力は相当強くたまに武器をポッキリ折る。

超重要人物を紹介しました。他のメンバーも随時紹介していくのでよろしく願います。

ハンター修行始めます(下)

「ここが溪流。綺麗な所でしょ？」

と師匠ラテさんが言う。確かにとても綺麗な所だ。でも此処は狩場。油断すれば一瞬で殺されてしまう。

今回の依頼は、特産キノコという茸を集めるものだというから、モンスター狩猟のように危険ではないらしいけど、それでも恐怖が緊張が動悸がする。

「ユキくん。この青い箱から、道具をとっておきなさい。地図や応急薬、お腹がすいた時のために携帯食料も入っているから。」

僕は慌てて、青い箱から、道具を取り出す。

いよいよ出発だ。それなのに、師匠はのんびりベットに座っていた。

「え？師匠せんせいは来ないんですか？」

「あつたりいゝ。1人で頑張つて来なさい！」

えゝ。本当かよゝ。こうなったら、1人でいくしかない。僕は1人、ベスキャンフBCを出た。

僕はエリア1に出た。

そこには、ガーグアという鳥のようなモンスターがいた。僕は咄嗟に武器を抜いたが、ガーグアはこちらをみると、騒ぎ立て、奥の川の方へ逃げていった。

「あぶねえー！ビックリした！」

いきなりだったため、武器を構えていても攻撃などできる状態じゃなかった。

「でも情けないな。気を引き締めていかないと。」

そう僕は独り言を言うと、エリア4の方へ走った。

エリア4

ここには、昨日予習しておいた肉食獣「ジャギイ」の姿があった。ジャギイは、こちらを見つけると威嚇した後、こちらの方へ向かってきた。

僕は、手に持っていたユクモノ鉈をしっかり握ると向かってきたジャギイに向かって、一振りした。

ウワツとジャギイが悲鳴をあげるとともに、鮮血が飛び散った。

血は見慣れたものではなかったが、驚きはしなかった。

それが狩人の覚悟であり、相手が血を流さなければ、こちらが流すことになる。厳しい自然界の掟だから。

しかし、傷つけられたジャギイは激怒したらしく、こちらを激しく睨みつけ吠えだした。

「ええっ！ジャギイが4匹に増えた！？」

ジャギイは吠えて警告すると、周りから増援を呼ぶ。そのことをすっかり忘れていた。

1匹で手一杯だったのに、4匹なんて不可能に近い。

こうなったら、手は一つしかない。

「邪魔だあ！」

僕は目の前のジャギイを斬りつけ、ジャギイが怯んだ隙を狙ってエリア7の方へ一目散に逃げ出した。

エリア7

ここには、さつき会ったガーグアがいて一応先ほどのような危険がないかを確認して、散策を始めた。

「お？これは…茸か？これかぁ。それじゃ採っておこつと。」

何がどの茸かは、よくわからないが一応、7つぐらい採った。まだ残っていたけど、師匠から採りつくしはよくないと言われていたため全ては採らなかった。

茸は、青いものや、触ると熱いもの、不思議な香りのするもの、いかにも毒茸だと思うものまであった。

他にも、いい香りがするものとかを採っておいた。

一旦戻ろうと考えた僕は、地図を見て9↓3↓2↓1の順に帰るところにした。

エリア9

僕がこのエリアに入ると、目の前に巨大な昆虫がいた。

僕は、コイツもモンスターか？と考えたため、武器を抜いたが、昆虫はこちらなどお構いなしにある方向へ歩いていった。

複数で固まってある方向へ向かっていたので、そいつをつけてみるとなんと茸があった。

「へえーこいつら茸とかをとろうとするのか。覚えておこう。って、僕の分がなくなるー！」

慌てて、5個ぐらい採ると、ポーチの中に滑り込ませて、先を急いだ。

と、そういえば、師匠が行き際に緑色の変なものを落としていったのを思い出した。

「これはなんなんだろう？緑色ってことは、回復系の道具かな？」
とそのとき、僕はつい深く考えすぎて、その道具を持っていることを忘れてしまっていた。

そして落としてしまったのだ。そのアイテムは、緑の煙を出すと、僕は眠りに落ちた。

僕が目を覚ますと、BCにいた。

僕は失敗したとおもって顔を曇らせていると師匠は、

「ユキくん、戻り玉を知らないで使っちゃったんだね。大丈夫。失敗はしてないよ。でも問題は、特産キノコを8個もっているか・・・」

「師匠一応分らないのもあったけど、それらしいものは持ってたよ。」

「ふーん。じゃあ見せてもらっていい？」

師匠はあのいい香りがする茸を数え始めた。あれは9個あつたはず。
「うん。成功！9個だね。これをあの赤い箱に入れて、終わり。さあ入れてきてごらん。」

よし！と喜びに浸りながら赤い箱へ入れた。

これでクエスト初クリアだ。僕と師匠は、竜車に乗り込み村へと戻った。

ちなみに竜車での話だけど・・・。

「ユキくんは、まだまだだね。ジャギィ一匹に振り回されていたでしょ？今日帰ったら腕立て500回ね。」

「えーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！つーかなん
で知ってるのーーーーー！」

溪流中に僕の声が響きまわったのはいうまでも無い。

そして翌朝は腕が筋肉痛で物が持てなかったとき。

Monster Hunterでしょ!?

ハンターになってから3日。結構疲れた。。。このぐらいでへばっている僕は、この先ハンターとして、やっていけるんだろうか。。。

そっぴゃ、ため息ばかりだ。ため息をつくとき、幸せが逃げていくって聞いたけど、本当ならおそらく半年ぐらひは、逃げてったなあ。。。

そんな感じで僕がうだうだしているとき、ラテさんが僕の家によつてきた。

「よーつす。ユキくん、元氣?」

「それがあんまり。。。。」

「あーやつぱり? 顔に出てるもん。『僕元氣がないつす。』って。」

「分かつてるなら言わないでくださいよあ。。。。」

やべ、「。。。。」が多い。僕ほんとに元氣が無いなあ。

「ごめんごめん。それで、多分あんまりハンターとしての才能が無いんじゃないかと思つて悩んでるんでしょう?」

「はい。。。そうです。」

「じゃあいい考えがあるんだけど、私の話を聞いてみない?」

なんだろう。僕が強くなれるならやりたい。

僕は、ラテさんの話を聞くことにした。

「つてこと。わかつた?」

「まとめると、モンスターの狩猟練習にラテさんと組み手をするつてこと?」

こくつとラテさんはうなづく。

「無理つすよあ! 大体モンスターの狩猟練習には、モンスターじゃないんですかあ!?」

チツチツチとラテさんは、人差し指を立てて、振る。

「モンスターの動きは確かに大体決まってるからそれに慣れれば、簡単によけられる。でもモンスターの種類はごまんといるんだよ？ それに対応できるように動きのまったく読めない人間と練習したほうが反射能力とか鍛えられるからいいとふんでるんだ。どう？ やつてみる気はない？」

「まあそういう理由なら、やってみます。というかやってみたいです！」

さっきの元気の無さはどこに行つたのかな？と僕も思う。

「よし！じゃあ、村の北側の階段を降りた先にある小闘技場で待ってるからね。まったねー。」

小闘技場。

「こんにちはー。」

「お、来たね。じゃあ、この防具に着替えといてね。あと、ここから好きな武器の形をした木刀をとっておいてね。」

そう師匠^{せんせい}は言くと、小闘技場の中に入つていった。

僕も装備を整えて、闘技場の中に入った。

「よし！じゃあ始めようか。」

師匠は2つの小刀を両手に持っている。いわゆる双剣といわれるものだ。

対する僕は、片手剣を持っている。

師匠は、手を上げて「先に来て良いよ。」と合図をしている。

僕は遠慮なく走りこみ、剣を振り下ろす。

しかし、ラテさんはその剣を左の剣で受けて右の剣で、僕の腹を突いてきた。

「げっ！？」

僕は1mくらい吹っ飛ばされ、ころころと転がった後もう一度立ち

上がり、距離をとる。

多分真正面から突っ込んでも駄目な訳で策を練らなければ、勝てないと思う。じゃなくて、確実に負ける。

僕は瞬時に策を立てると、また真正面から突っ込む。

剣の刃（と思われる部分）を横向きにして再度握り、師匠の胴に向けて叩こうとすると、今度は横向きにした刃を右で受けられて左で突かれた。

僕はまた吹っ飛ばされて、同じように立ち上がる。

行動パターンはどちらかの刃で、僕の刃を受けその隙に、一閃。つてことだろう。

ならば、突っ込んでも剣を振らずに、一度よけて叩く。その作戦でいくことにした。

頭で練った作戦通り、先ほどと同じように突っ込む。剣で叩く振りフエントをして、師匠の右の剣を頭を上げてよけ、剣を振り下ろして叩いた。はずだった。僕はまた左の剣に腕を叩かれて横に吹き飛んだ。

「あゝ。痛ててて。」

「大丈夫？どんどん来てよ！」

そっぴや、師匠は全く一つの位置から動いていない。それだけ、余裕ということだ。

こうなったら下手な策なんて捨てて、相手の攻撃をよけて隙を見つけるしかない。

決まれば実行にうつす。僕の作戦のひとつだ。

片手剣を構えて、師匠にむかって駆け出すと、師匠の剣に入っていることが分かった。

来る。師匠の一閃が。

僕は直感でそう感じとり、師匠の一撃目をかわす。続いて二撃目も感じとったとおり、少し横によけてかわす。続いてきた攻撃は二連撃。後ろに2歩下がってその後大きく1歩前に出て、間合いをつめ

る。

そのあとの一撃を右に少しよけ、左手を振ることを見切つて前に踏み込み剣を振り下ろす。

いける！！そう感じた刹那、剣を持っていたほうの腕に激痛が走った。

「痛てえ！！ちきしょう！もうちよつとでいけたと思っただけど
．．。」

僕は、激痛でジンジンする腕をもう一つの手で、さする。

「本当に惜しかったねー。ちなみに．．。ユキくん？盾の存在は知ってるよね？」

「あ．．。」

「やっぱり。ユキくん戦いに熱中すると攻撃一方になるから、おそらく防御なんて脳みそから消し飛ぶんだろうね。ということは盾のある武器はおそらく無駄。そしてリーチのある武器がもつといいねってことは．．。太刀が一番妥当な線だよ。」

太刀。僕が初めて見た武器だ。そして、師匠の太刀裁きを見てハントーの魅力を感じた。

「僕、太刀使つてみます！」

「よし！そうと決まったら練習だ！じゃあ太刀を持ってきてね。」

「師匠、その前に10分休憩いただけませんか。」

師匠はにこつと笑つて、

「ダメ。」

「ううゝゝひでえ。」

「さあ。かかつてきなさい！」

師匠の気迫が、さつきより大きくなっている。さすがは太刀を使いこなせる人である。

太刀は、自分の気を練つてその気を刃に乗せて、相手を叩き切る。その一番強い奥義が、気刃斬りだ。

その気を練るには、ものすごい気迫と心が必要といわれている。師匠は、その強い心と気迫を持つ、精神的にも最強のハンターということ。

師匠は持っている武器は双剣であるもののこのぐらいの気迫が出せる。これは、おそろしく強い証だ。

僕は細長い木刀を強くしっかり握ると、走り出して師匠の目の前で止まり、横に薙ぎばらって距離をとる。俗に言う、斬り下がりというやつだ。師匠は後ろに一步下がり、指を立てこちらに合図する。3歩で距離をつめ、太刀で突く。師匠はそれを横によけて僕に斬りかかる。右剣をよけて左剣を太刀で受け止める。

「そういう使い方は、初めてみたな。さすがは私みたいな双剣で武器を受ける人の弟子だね。だけど、攻撃は止まないよっと。」

師匠はそういうと、手が空いている右剣を振り下ろす。僕はつばぜり合いになっていた太刀を引き戻し左にかわす。師匠は体をひねり、追撃。その剣にあたらないうちに僕は前転。

師匠の猛攻には、よけるしかない。隙を見つける。考えるなよ僕。感じるんだ。

右から左から、剣がとんでくる。身をかがめて、前転して、横に跳んで、攻撃を受け止めて。あらゆる手段で師匠の攻撃をかわす。よけ続けて、二分間。師匠は、両手で目の前にいる、僕を攻撃してきた。

いましかない。

僕は身をかがめて、太刀の先で思いつき師匠を突いた。

師匠は少し宙を舞って、受け身を取った。

「すごいねー！私の動きにここまでついてきたのは初めてだよ。ユキくん、君才能があるね。もうちょっと練習すれば、絶対強いハンターになれる。おめでとぅ。」

「へへへー！」

師匠の褒めの言葉の嵐に、ただニヤつくしかなかった。

その後、僕と師匠は闘技場を出て、村の中心の広場にいた。

「じゃあ、帰ろうか。もう日が暮れてるし。じゃあまた明日ね。」

「師匠、ありがとうございます！」

僕は喜びに浸りながら、家に戻った。

「よし。明日もがんばるぞー！」

一少年の家から、気合のある声が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7536q/>

MHP3 命を断ち繋ぐ者

2011年2月19日17時01分発行